***Aedes nipponicus* LaCasse et Yamaguti と *Aedes nippononiveus* Sasa et Nakahashi に関する考察：**
 中田五一¹⁾・松尾喜久男²⁾ Nakata, G. & Matuo, K.:
 Studies on *Aedes nipponicus* LaCasse et Yamaguti
 and *Aedes nippononiveus* Sasa et Nakahashi

日本産シロカタヤブカは *Aedse nipponicus* (= *A. nc.*) と *Aedes nippononiveus* (= *A. nv.*) の 2 種が記載されている。 *A. nv.* の記載によれば両種は成虫より幼虫に顕著な差異がある。しかしながら京都附近では口刷毛の櫛状構造に *A. nc.* 型から *A. nv.* 型に移行する状態が認められ、且つ同一水域に諸型の混棲が認められる点から著者らは両種が果して別種か否かに疑問をもち、これを解明する為に諸般の実験並びに観察を進めている。著者らは今回京都附近の墓地内 1 あかうけ水域で採集したシロカタヤブカの諸形質について個体別飼育実験による検討を試みた。測定標本 82 個体中櫛状口刷毛をもつもの (= *nc.* 型, + 型) 44, もたないもの (= *nv.* 型, - 型) 36 で、残りは + 型, - 型の中間型 (± 型) で棒状口刷毛を有するが櫛状を呈しない。棒状口刷毛は ± 型のみでなく + 型の個体にも混在する。+ 型の櫛状構造は多数の切れ込みの見られるものから切れ込みが浅く且つ少ないもの等種々の段階がある。以上の結果より口刷毛の形状に *nc.* 型から *nv.* 型に移行する漸進的過程のあることが再確認された。幼虫触角毛については *A. nv.* の記載によると亜先端毛は *A. nc.* に比し長い、本成績でも、その傾向が認められるのみならず、先端毛においても一型が + 型に比し、長い傾向を示す。なお ± 型は両型の中間の数値を示す。亜先端毛の位置に関しては、これも *A. nv.* の記載と同様一型の亜先端毛が先端毛から離れて位置する傾向を示す。雄外部生殖器の端刺と把握片の長さの比は大きい変異を有するが両種の原記載と同様 + 型がやや大きい傾向を示す。± 型は両型の平均値の略中央値を示す。幼虫側鱗数、雄小把握片、腹部の節背板剛毛数、雌雄胸部 ppn (両型共 2 白斑を有す) の形質については両型の間に差は認められない。以上の結果より日本産シロカタヤブカには 2 つの group があるらしいと云う事は云い得るが、これだけでは *A. nc.* と *A. nv.* が別種であるか否か、また両種の鑑別点をどこに求めるかという点については結論を下し得ない。今後更に実験を重ね、この問題を解明したい。

(京都市衛研¹⁾, 京府医大・医動物²⁾)

✓ 京都市附近の樹洞に生育する蚊幼虫・蛹について：中田五一¹⁾・小野禎治²⁾ Nakata, G. & Ono, T.: On the larval and pupal fauna of mosquitoes breed in tree holes about Kyoto City

1953 年～57 年に至る間、京都市附近の山地性、山脚性樹洞延 14 水域を調査した結果、出現した種類は 6 属 10 種で、その中シロカタヤブカが最も多く、これとオオモリアノフレス、コバヤシヤブカ、トワダオオカの計 4 種が樹洞専住種と考えられ、ヤマダシマカ、キンバラナガハシカ、フタクロホシチビカは類住種、ヤマトヤブカは汎住的に出現したと解される。蚊の幼虫・蛹を発見した樹種はケヤキ、ムク、カエデの 3 種、水表面積 2～470 cm²、水深 1～19 cm、水色は概ね褐色であつた。季節的水温較差は比較的狭く、最高 25°C (6 月上旬)、最低 8.2°C (2 月上旬) で、降雨等による水位の高低が甚だしく、水底には種々の程度分解した枯葉等の堆積を認めた例が多い。次に左京区内の山脚性樹洞内蚊相の周年遷移を 1956 年 9 月から翌年 10 月まで、毎月 1～2 回の割合で継続調査した。4 水域の総合採集成績では、2 属 8 種が採れ、シロカタヤブカが圧倒的に優占位を占め、ハマダラナガスネカ、キンバラナガハシカがこれに次ぎ他は少数であつた。季節的出現様相を見ると、シロカタヤブカ幼虫は 4～10 月上旬、蛹は 6～10 月上旬の間、出現を認め、本種が優占位を占めるのは春から秋までの半年間で、他の季節はハマダラナガスネカに地位を奪れる。この種の樹洞ではこれら両種が専住種と考えられる。両種は暖期と寒期を季節的にすみわけているが、これは前者が卵態、後者が幼虫態越冬することに起因する。その他の種類は、キンバラナガハシカが夏季に、フタクロホシチビカは秋から冬に稍々連続に出現し、これらは前述のように類住的出現で、専住水域の多発期に姿を現わしたと考える。同様にヤマダシマカとヒトスジシマカは類住的に、ヤマトヤブカは汎住的に出現したと思う。

(京都市衛研¹⁾, 京都市上京保健所²⁾)

✓ 川崎市における蚊対策の基礎的調査 (第 1 報) ライトトラップによる蚊成虫相の周年調査：緒方一喜¹⁾・永井尚三郎²⁾・和田明²⁾・加藤幹夫²⁾・小清水憲雄²⁾・鈴木猛³⁾ Ogata, K., Nagai, N., Wada, A., Kato, M., Kosimizu, N. & Suzuki, T.: Practical studies for mosquito control in Kawasaki City (I) Seasonal occurrence of mosquito adults collected by light traps

川崎市における蚊対策の科学的な検討を計画し、手始